

あったと

むかし、あるところに、じいさんとばあさんがいました。

ある日、じいさんは土間をはいていました。ばあさんは座敷をはいていました。すると、土間に大きな豆が落ちていました。じいさんは、

「この豆、種にして畑にまこう」といいました。するとばあさんは、

「いや、この豆は、いって食べよう」といいます。

とうとうけんかになってしまいました。しまいにばあさんが負けて、じいさんは、豆を畑にまきました。

豆は、やがて芽を出して、ずんずんのびて天までとどきました。

じいさんは、なたで豆をもぎもぎ、豆の木を登っていきました。すると、なんだかもやんとしたところへ出ました。そこは雲の上で、雷さまが昼寝をしていました。雷さまは目をさまして、

「おう、じいさん、来たか。昼寝起きに夕立ふらせるが、おまえ、ちよつと手伝えや」といいました。

「手伝うって、どうしたらいいんだ」

「いや、たいしたことでない。おれが、ぴかぴかごろごろ、光を出したり、音を出したりするから、じいさんおまえ、手おけの中にはしを入れて、水をひとつたらしずつ下の世界にたらせ。いい夕立になるから」

それから、雷さまは、じいさんに、たにしのようなしこしこしたうまいものをくれました。じいさんが、

「これは、なんでもんだ」ときくと、雷さまは、

「それは、子どものへそだ。はだかでいた子どものへそを取ってきて煮たものだ」といいました。

さあそれから夕立を始めました。雷さまが、ぴかぴかごろごろやると、じいさんは、手おけの水に箸を入れてタクンと下にたらししました。そしたら、ざあざあ大雨になりました。じいさんはおもしろがって、タクンタクンとたらししているうちに、手おけの水をいちどに

どうつとぶちまけてしまいました。下は海のようになって、じいさんはびっくりして下へ
落ちてしまったという事です。
いきがぼーんとさけた

原話：『こせ警女のごめんなんしよ昔』水沢謙一編／講談社
再話：村上郁